

明治二十九年の虚子 (Ⅲ)

——『五百句』評訳と研究・「繩朽ちて水鶏叩けばあく戸なり」考——

小澤 實

繩朽ちて水鶏叩けばあく戸なり

明治二十九年

初出は、新聞「日本」(明治二十九年六月四日(水)第二四二六号)。第一面左下隅に子健、浅茅、蒼苔、花牛堂、波静、鳴雪、石牛生、香庵以上八名の句のあと、最後に置かれている。初出の形は、

繩朽ちて水鶏叩けば明く戸なり

である。

異同は、初出の形の他に

繩朽ちて水鶏叩けば明く戸也

『新俳句』

繩朽ちて水鶏叩けば開く戸なり

『年代順虚子俳句全集』

がある。

*

掲出句が作られた日時、状況は不明。明治二十九年六月三日以前としか特定できない。

*

この句の季語は、「水鶏」。

虚子編『新歳時記』（昭和九年刊）より引用する。

「夜鳴て旦に達す。聲人の戸を敲くが如し」といはれる鳥である。「蓋し水邊にあつて、晨を告ぐ、故に水鶏と名く」と三才圖會に書いてある。春來て秋去る候鳥で、水邊・沼澤の雑草中に夏を越す。叢中を潜行して滅多に飛ばな

いので姿を見ることは稀である。カタ／＼と連続して聞こえるのは、ひくひな緋水鶏といふ類で、六月頃の交尾期によく鳴くのであるといふ。動物學上では、水鶏は誤用として、秧鶏と書く。水鶏くひな笛。

『図説俳句大歳時記』の中西悟堂の解説は、用字の誤用、形姿、生態について詳しい。

水辺にすむので水鶏と書き、イネの秧なえ時の鳥なので秧鶏と書くが、中国では水鶏はカエルである。緋秧鶏は雄雌同色。前頭は赤栗色、背面はオリブ褐色、下面はあご・のどが白く、頭とくびの側面および胸は美しい赤栗色、腹以下は淡色。全体赤っぽいので緋秧鶏の名があり、足も赤く長い。水辺の草間の地上や稲田に少量の枯れ草を集めて巣とし、雛は孵化当時は全身黒い綿毛におおわれ、泳ぎまた歩行する。鳴き声は初めは間を置き、あとは急調子で、キョツ、キョツ、キョツキョツキョッキョッキョッキョとしだいに早まり、このキョを五〇回も反復してつづけ、いったん区切って、ふたたびゆるい鳴き出しから急調に移る。

解説は、その姿についても詳述するが、伝統的にはその声が詠われることが多かった。

その「鳴聲がカタカタと連続して、人が戸を敲く音に似てゐるので、其の鳴くことを叩くといふ。」(浜中柑児著『虚子五百句鑑賞 明治之部』——以下「鑑賞」と略す)のである。

掲出句をローマ字で表記してみると(na wa ku ti te / ku i na ta ta ke ba / a ku to na ri)となる。a音の連なりが明るい印象を与えていること、そして、k音とt音の交替が四回にわたって行われていることに気づく。つまり一句全体が水鶏の声を感じさせてもいるのだ。

さらに「鑑賞」は、「この水鶏叩けばといふのは、くひなを擬人して、若し水鶏が人を訪れて戸を叩いたらと假設して言つたものである。」とまで述べる。この思いも含まれるかもしれないが、やや鑑賞過剰か。水鶏が鳴いて、その鳴声が戸に響いていると読んでおけばいいだろう。

なお、「水鶏」は、古来和歌の時代から「叩く」と「戸」が合わせて詠まれることが多かった。それについては後述する。

「繩朽ちて」の「繩」は、戸をくくりつけ鎖すためのものである。このあたりの状況を「鑑賞」は詳細に解説している。

◎隠棲の草廬の様を詠んだものであらう。その草庵は鴨長明の方丈の室のやうに「土居をくみ、打覆を葺きて、繼目ごとに掛金をかけたり。」といつたやうなほんの茅屋で、その庵への入口には篠竹をまばらに編んだ枝折戸が繩でくくりつけてあり、それを開けて這入ると、苔の花道が細々とつゞいてゐるといつたやうなものであらう。

戸を繩でくくりつけてあるといふのであるから、あまり訪れてくる人もなく、庵主は寧ろ人に會ふのを好まないものであらう。繩も朽ちたまゝにうち棄ててあるところを見ると、自らもあまり開け立てをしないものと見える。

水鶏は鶉よりも少し小さい程の鳥である。カタカタ、とあの啼聲ほどの叩き方しても、すつと繩が切れ、開く戸は、どれほど便りないものであるかは想像がつくであらう。

その環境も非常に幽邃なところで、あたりに水鶏がしきりに鳴いてゐるほか、何も耳目を惹くものはないのであらうと思はれる。こゝに庵主の高踏的な隱遁生活がゆかしくにじみ出てくる。

長い引用になった。なぜ戸を縄でくくってあるのか。なぜその縄が朽ちたのか。「水鶏叩けばあく」ような戸はどのようなものか。また、それによって知られる草廬およびその周辺の雰囲気そしてそこに住む人について行き届いた鑑賞を行っている。加えるものはない。

*

『鑑賞』は、この句が生まれた契機について次のように述べる。「作者は此の浄境の隠遁生活を見て、折柄鳴く水鶏の聲を耳にし、水鶏が人の戸を叩くといふ古歌に思い寄り、庵主の生活をなつかしんで詠んだ句である」。

つまり、

- 一、浄境の隠遁生活を見る
- 二、水鶏の声を耳にする
- 三、水鶏が人の戸を叩くという古歌に思い寄る。
- 四、庵主の生活をなつかしむ

この四つの条件が重なった上において、掲出句が詠まれたとするのである。『鑑賞』の著者浜中柑児氏は、みごとに作品鑑賞をしているが、作品と作者とをいささか密着させすぎているように思われる。一、二、は作句状況が明らかにならない現在、可否は不明である。

三、は正しいと思われる。水鶏を詠みこんだ古歌、俳句を検討してみたい。これについては後述する。

四、これも否定はできない。その上で庵主とは誰かを考えてみたい。

また、「研究座談会」(三〇九)「玉藻」昭和五十四年一月号所収)には次のような発言が見られる。

敏郎(清崎) 「庵の枝折戸みたいなものも、もうぼろ／＼になつちやつて、水鶏の声が響けば枝折戸がすぐに開

くやうな、或る意味では神仙体かも知れない。中にゐる人、庵にゐる人を考へると……。」

晴子(高木) 「写生ぢやなく考へただけですね。」

敏郎 「え、さうですね。」

英 (本井) 「仙境の隠者に思ひを馴せてその中で句作りしてゐるといふやうな句でせうか。」

「鑑賞」のような実見の立場でなく、「考へただけ」「思ひを馳せてその中で句作りしてゐる」という把え方には賛成である。

ただ、「神仙体」という発言はどうだろう。たしかにフィクションの雰囲気はある。が、「神仙体」として発表された怒濤岩を噛む我を神かと臚の夜

神の子の舞ひ／＼春の入日かな

羽衣の陽炎になりてしまひけり

などと比較すると、ずっと現実に近い雰囲気ではないだろうか。それに「庵にゐる人」も「仙境の隠者」というほどではない。現実に生きた人物を思うほうが自然だと思ふからだ。

さて、子規の自選歌集『竹の里歌』に明治二十五年作として次の短歌が見える。

根岸閑居

雨にくち風にはやれし柴の戸の何を力に叩く水鶏そ

この掲出句に似た歌の初出は、明治二十五年三月中旬高浜虚子宛の子規書簡であった。

このころ虚子は伊予尋常中学校卒業を控へ、第三高等中学校予科一級入学を予定していた。ところが、九月からの高等中学入学を一年延期し、美文家の書生となって小説の勉強をしたいと考えるようになった。その相談の書簡、三月十四日付子規宛虚子書簡に対する返簡がこれである。

子規はまず、虚子にも見せた小説『月の都』の草稿が、今、二葉亭四迷のもとにあること、幸田露伴邸を訪問したことなどを述べたあと、虚子の相談に答える。「貴兄上京云々ニ付テノ御勇氣感心致候 小生ノ意見迎モ青桐子ト同ジク中立位ノ処也」と書いた上で、具体的な提案をしている。「そこで小生の考にハ貴兄四月下旬に中學ヲ竟^まへ九月ニ高等中學へハイラル^ゝモノナラバ猶四ヶ月ノ餘暇アル故先ツ其間ダケ東京へ來ラレテハ如何。四ヶ月ノ間ニ能ク觀察スレバ東京ノ事情モ大畧分ル故其上ニテ猶一年逗留スルトモ又早速京都へ行クトモ御考モ付クベシト存候」。そして、常盤会寄宿舎へ入ること、あるいは、子規寓居への同居まで勧めている。

子規の真意は、三月二十五日付河東兼五郎宛書簡に見える。「虚子の事は同氏よりの手紙にて承知致候 小生も其説を賛成する譯には無御坐候得共それ程迄に思ふものを無理にとめて中学校へ入れた處が勉強も出来まじく候故一まづ出京する方よろしかるべしと申やり候 直に面談致候は、同人の意氣込も相分り又當地の事情も分り候事は必然に付其上にて小生も意見を吐くべく同人も確乎とした見識の出来可申と存候 假に虚子の説よしとするも東京には虚子の ideal

の如き小説家も文人も無之には閉口するならんと存候」。

かかる事情であり、結局は虚子も断念するのであるが、この書簡を受けとったときの虚子の喜びは想像するに余りある。小説家への夢が、確かに一步現実に近いと思つたことだろう。

そして、本書簡は、子規の家の向いに住む陸羯南邸にて詠まれた短歌二首によって、次のように閉じられている。

弊寓ハ鶯横町といふ根岸の名所にあり

うくひすのねくらやぬれん呉竹の根岸の里に春雨そふる

當地ハさすがの名所だけに鶯もなき杜宇もなき水鶏もなくよし、今夜も陸氏と話しつつある時に水鶏の聲頻りに聞えけれハ坐上即興

雨にくち風にハやれし柴の戸の何をちからに叩く水鶏ぞ

陸氏曰何をちからとあからさまにいハぬ方よろし云々

貴評をこふ

陸羯南は、新聞「日本」の主筆兼社主。子規の叔父、加藤恒忠は司法省法学校入学以来の羯南の親友であり、その紹介で明治十六年六月頃上京した常規少年は初めて羯南に会っている。それ以後何かと眼をかけられているが、この年二月二十九日の本郷追分町から上根岸、陸羯南邸西隣への転居も羯南の肝煎りによる。五月二十七日新聞「日本」に「かけはしの記」を以って登場、そして十一月には、日本新聞社に入社するに至る。(陸羯南「子規言行録序」(明治三十五)・川村欽吾「子規と陸羯南」『子規全集』第十八卷月報(昭和五十二)参照)松山にある虚子にとって二十四年六月「近

時政論考』、九月『行政時言』と続々政治論書を刊行している陸は、二葉亭、露伴とともに眩しい存在であったに違いない。そして、羯南邸にて詠まれ、羯南の評まで加えられたこの歌もまた印象深いものであったに違いない。

根岸は、「江戸から明治にかけて、武家や大町人の別荘が多く、鶯の名所・根岸の里として知られた」（『地名俳句歳時記』）土地である。この書簡末尾に付された歌一首目は、引越して間もない根岸への挨拶をその代表的景物「うぐひす」を以って行っている。雨の中、鶯の音は聞こえていない。それを、「うぐひすのねくらやぬれん」と詠っているのだが、観念的であり、『竹乃里歌』にも掲出されなかった。そして、今問題にしている二首目は、それに対して今まさに鳴いている水鶏を詠っている。三月中旬であり、実際に水鶏であったかは疑問であるが、鶯の名所の地において水鶏の声を聞き、それを「坐上即興」に詠うことに喜びを感じている。かなり俳諧的傾向の歌であると言える。

雨に朽ち果て、風に破れてしまった柴の戸―雑木で編んで作った粗末な戸―は叩いても音がでるはずもない。それなのに何を力にして水鶏は叩いているのだろうか。この「力」はよりどころといった意だろう。風雨の中、鳴きつづけている水鶏の声を、破れ果てた柴の戸を置くことによって表現しているのである。

羯南の評が加えられている。「何をちからとあからさまにいハぬ方よろし」である。「雨にくち風にハやれし柴の戸」と「叩く水鶏」とを結びつけることばとして「何をちから」は「あからさまに」過ぎるということである。そのような柴の戸なれば、「何をちからに」は当然すぎるということだろう。それは表現が重複しているとも言える。ただ、それによって一首に厚みが加わっているとも読めるから、羯南の評の可否を即断することはできない。

しかしながら虚子が、虚子の将来を展くと思っただろうこの書簡に添えられたこの歌をこの評とともに眼に焼きつけたことは間違いない。そして、この歌が掲出句発想の契機になっている、とまでは言えなくとも、掲出句を案ずる虚子の心懐のどこかにこの歌と評とが存しただろうことは否定できない。

「雨にくち」の歌と掲出句とを比較すると、「朽つ」「水鶏」「叩く」「戸」の四語が共通する。それだけの語を、子規の歌から借りて、この句は成っている。その上で「雨にくち風にハヤれし」の部分を「繩朽ちて」と選びに選んだものに託し、「あく」と動きを加えている。そして「何をちからに」の部分は削除している。つまり、掲出句そのものが、この歌について子規に「貴評をこふ」と呼びかけられた虚子の、俳句型式による解答になっている。

そして、この短歌を隣に置いてみると、この句に詠われた場所が全くの空想の場所ではなく、根岸らしく思えてくる。さらにこの草庵の主に子規の面影を重ねることもできそうである。

子規は俳句でも水鶏を詠っている。

垣こえて雨戸をたゞくくぬな哉

根岸

水鶏叩き鼠答へて夜は明ぬ

『寒山落木』卷一 明治二十五年夏

先の短歌がつくられた年の作である。

前句、短歌とほぼ同じ内容を句にしている。あるいは子規寓居での句か。柴の戸が雨戸に変わってあっさりと詠われている。「垣こえて」は掲出句「繩朽ちて」に形は似ているが、比較にならぬほど平板である。

後句、はつきりと「根岸」と置かれている。「答へて」は、偶然、鼠が鳴いたか、天井を走り抜けたかしたのを意味しよう。水鶏が草庵の戸を叩くという伝統的なパターンに鼠を加えているわけだ。この句、虚子は、明治二十五年七月一日付子規宛書簡のなかで、「根岸閑居と御座候が実境御詠の程ゆかしく候」と評価している。このような詠作を読む

ことを通して虚子の中で水鶏と根岸は、結びついていったことと思われる。

翌二十六年の子規の作品には二句見える。

根岸

古澤や家居の中に水鶏鳴く

吉原や水鶏にさむる人もなし

『寒山落木』巻一 明治二十六年夏

うち一句が、「根岸」と置かれている。ただ、内容は「古澤」と「家居」との関係が明確でなく、佳句とは言いがたい。そして、掲出句がつくられた明治二十九年には五句見える。

水鶏やんで山僧門を叩きけり

沼浅く藺生ふるところ水鶏鳴く

戸敲くは水鶏か八百屋か豆腐屋か

狸来ずなりぬ水鶏や戸を叩く

悼

いたづらに叩く水鶏や墓の門

『寒山落木』巻五 明治二十九年夏

これらの句は根岸の水鶏とは特定できない。ただ、三句目など根岸の感じがないでもない。根岸の草庵の戸を叩く出

入りの八百屋豆腐屋ではなからうか。

このように見てくると子規俳句における水鶏と根岸との関係は深い。

『新俳句』（子規関、上原三川・直野碧玲瓏編 明治三十一刊）にも

水鶏聞きに来よと申しぬ上根岸 墨 水

という句が見える。この「申し」ているのも子規だろうと思わせるところにおもしろみがある。

このような水鶏と根岸との結びつきを押さえた上で、掲出句も読むべきである。ただ、子規庵を描いたというのは、直接にすぎる。その連想を加えて味わいたいということである。

子規そして子規周辺の人々は、水鶏からすぐ根岸子規庵を連想しただろう。そして実際の子規庵の風景、その実像と
のずれにもおもしろみを感じたことだろう。

*

先に紹介したように浜中柑児氏は、掲出句が生まれた契機のひとつとして「水鶏が人の戸を叩くという古歌に思い寄る」という点を指摘していたが、それを検証しておきたい。先述したように「水鶏」という季語は「叩く」「戸」という語と密接な関係を持っている。その点を中心に「水鶏」という季語の歴史を辿ってみたい。

『和歌大辞典』によれば、

永久百首題。勅撰集でこの題明示の歌は金葉集の二首のみ。初見は正暦年間（九九〇～九九五）夏、花山法皇東院歌合。歌合歌題として数多く用いられた。古今六帖の分類項目となっているが、歌材としてはあまり詠まれることはなく、勅撰集では後拾遺集以降に見られるに過ぎない。

とされている。

初見とされる「花山法皇東院歌合」の水鶏は次の通りである。

くひな 左

いちこ

むかしよりあげがたからぬなつのよをいかにとたたくひなるらむ

右

院 御

なつのよはたたくひなにほどもなくあまのととくもあけにけるかな

また、『後拾遺集』においては次の通りである。

山ざとのくひなをよみ侍ける

大中臣輔弘

やへしげるむぐらのかどのいぶせさにささずやなにをたたくひなぞ

続く『金葉集』には二首見える。

俊忠卿家歌合にくひなの心をよめる

藤原顕朝臣

さごとくにたたくくひなのおとすなりこころのとまるやどやなからん

摂政左大臣家にてくひなの心をよめる

源 雅光

夜もすがらはかなくたたくくひなかなさせるともなきしほのかりやを

『鑑賞』が引用するのは、この雅光の歌である。

これらの歌すべてに、「たたく」が詠みこまれている。先に紹介したように、その鳴声の形容である。また、「花山法皇東院歌合」は二首ともに「戸」も詠み込まれていた。これが踏襲されていくことになる。

また内容も、「やへしげるむぐらのかどのいぶさせ」や「させるともなきしほのかりや」など、平安時代の和歌を評するのに適切ではないだろうが、草庵を感じさせるものが詠われていることに注目したい。

また、「戸」を詠う際に、「ささずや」「させるともなき」と鎖をかけていない状態が描かれていることにも注目したい。掲出句の「繩朽ちて」という把握は、この状態を俳諧的に具体的に詠うものである。そして、「水鶏叩けばあく戸なり」という部分は、『後拾遺集』の輔弘の歌や『金葉集』の雅光の歌の傍に置いても異和感はない。

先に、掲出句のことは四語（朽つ」「水鶏」「叩く」「戸」）が、子規の「雨にくち」の短歌と共通することを述べた。ただ内容の面から言えば、掲出句は、子規の短歌よりも、ずっと『後拾遺集』や『金葉集』の歌に近い。共通する語は「水鶏」「叩く」の二語しかないのであるが、鍵をさしていない戸を水鶏が叩くという発想が共通するのである。

つまり、この句において虚子は、水鶏の本意をつかみ、それを俳諧化しているのである。だからこそ、子規が死に、子規庵が建替られ、周辺の雰囲気は全く変わってしまった今も、この句は魅力を失なわない。

*

水鶏は虚子の愛した謡曲にはあまり登場しない。その稀な例として「合甫」の右の例があることを補記しておきたい。

叩く水鶏くひなの外そと面に立つや久方ひさかたの。埴生はによの小屋こざめに小雨降る。

「叩く」とともに用いられている水鶏の一例である。

*

『俳諧類船集』の「水鶏」の付合語には「柴の戸」は見えるが、「戸」も「たたく」も見えない。しかし「戸」・「叩」の付合語には、それぞれ「水鶏」が掲げられている。つまり、「水鶏」にとって「たたく」も「戸」も付合語辞典に掲

けるものはばかられるほど密接な関係をもっていることはであるわけだ。当然、俳諧における水鶏の句にも、これらの語は詠みこまれている。

子規編『分類俳句全集』から、「戸」と「たたく」が含まれている句を抜き出してみたい。これには連歌の発句も含まれている。まず「戸」から。

水鶏（一）除神人等

月のさすとはそも知らぬ水鶏哉 宗 祇（老葉）（傍線小澤、以下も同じ）

天の戸を月にまかする水鶏哉 宗 祇（大発句帳）

槓の戸に月をいれたる水鶏哉 宗 養

月見よと戸口いさむる水鶏哉 宗 春（三籟）

水鶏（雷）（雲）（天河）（風）（星）（虹）

天の戸の横雲いそぐ水鶏かな 宗 長（壁草）

水鶏（雨）（日）（天空）

槓の戸や水鶏に替るけさの雨 宗 碩（大発句帳）

天の戸もこもる声ある水鶏哉 紹 巴

水鶏（植物）

水鶏なくむら苗はこふ朝戸哉 宗 長（宗長手記）

まれに明て松の戸さゝぬ水鶏哉 宗 牧（宗牧発句帳）

真こも刈るうさに戸叩く水鶏かも 円木(卯辰)

水鶏なくあし原暗き朝戸哉 宗長(宗長日記)

水鶏(地理と器物)……(肢体)

水鶏鳴く谷に夜深き朝戸哉 宗祇(老葉)

水鶏(神人と建築)(飲食)

枝折戸のかけかねしらぬ水鶏哉 水来(類題発句集)

水鶏(土木と時令)(類倫) 杜寺旅宿城関

水鶏なく夜はよひのまの朝戸哉 宗牧(壁草 宗長発句帳 大発句帳)

戸さしせぬ御代にも叩く水鶏哉 心敬(心敬発句帳)

戸たゝくはたそかれ時の水鶏なる 如梅(真木柱)

雪院に叩く戸はなき水鶏哉 左原(三千化)

手みしかに関の戸叩く水鶏哉 其丸(馬光句集)

関の戸に水鶏の空音なかりけり 燕村(句集)

水鶏(土木) 除時令類倫・除城関廁

蘆の家に槓の戸叩く水鶏哉 肖柏(大発句帳)

戸あくれば叩きそこなふ水鶏哉 夜章(蘆分船)

支考百ヶ日

草の戸の押力なき水鶏哉 可哉(文星観)

大津湖仙亭

は(笈日記)
此宿も水鶏もしらぬ扉哉
はせを(はせを句選)

啼く方へ草の戸動く水鶏哉
舎国(月影塚)

水鶏きくや楨の古戸の下屋敷
素外(句鑑)

油断して水鶏に扉叩かるな
支考(葛松原)

誰を今松のとはその水鶏哉
宗養(大発句帳)

水鶏もやまつ室の戸の法の声
紹巴

水鶏(神人)(飲食)(肢体)除建築

更々て水鶏もやすむ扉哉
庭台(勅随筆)

続いて「叩く」の用例である。ともに用いられている場合は重出する。

水鶏(一)除神人等

三日月の細きをたたく水鶏哉
孚中(東華)

水鶏(雷)(雲)(天河)(風)(星)(虹)

氏雲にまけしと叩く水鶏哉
荷兮(千鳥掛)

雷をしづめて叩く水鶏哉
露川(類題発句集)

水鶏(雨)(日)(天空)

たたくられる雨に猶啼水鶏哉
太無(句集)

むら雨のあとや水鶏の一たつき
梅跡(東華)

水鶏 (動物等)

やれ水鶏なく程叩けほととぎす

重弘 (鷹筑波)

水鶏 (植物)

真こも刈るうさに戸叩く水鶏かも

円木 (卯辰)

水鶏 (地理と器物) …… (肢体)

住吉千句

舟ばたを叩く細江の水鶏哉

昌察 (三籟)

日焼田に水門叩く水鶏哉

蓼太 (蓼太句集)

水鶏 (地理) 除肢体等・水辺ナシ

岩たゝく水にともなふ水鶏哉

宗碩 (大発句帳)

水鶏 (水辺) 除地理・除肢体等 除流水海辺

波うてば叩きかへしの水鶏哉

利清 (毛吹草)

沼津にて

沼つたひ叩く水鶏やどろ田棒

近之 (洗濯物)

鳴立澤

折からの澤や水鶏の叩き居

東鷺 (小弓俳諧集)

池近し水鶏の叩く音にさへ

操舟 (古今句鑑)

水鶏 (器物) (衣冠)

飯櫃の底叩く音の水鶏哉

成美(谷風草)

別

樽の底叩く水鶏の別哉

佐巴(夏衣)

水鶏(神人と建築)(飲食)

人の門叩けは逃る水鶏哉

也有(羅葉)

我いらん門先づ叩く水鶏哉

宗因(三籟)

水鶏(神仏類)(血肉)(惡漢)除飲食等

よひまとひ

よひくは小坊主叩く水鶏哉

当歌(其袋)

水鶏(神人)除飲食等・除神仏類血肉惡漢

聲の背中を叩く水鶏哉

可省(三千化)

水鶏(土木と時念)(類倫)社寺旅宿城関

戸さしせぬ御代にも叩く水鶏哉

心敬(心敬発句帳)

戸たたくはたそかれ時の水鶏なる

如梅(真木柱)

雪院に叩く戸はなき水鶏哉

左原(三千化)

白壁のお城をたたく水鶏哉

馬泉(桃首途)

巢には子を叩き寝さする水鶏哉

一雪(洗濯物)

手みしかに関の戸叩く水鶏哉

其丸(馬光句集)

北野奉納

かしは手を水鶏もたたく宮ゐ哉 前左大臣(新つくは)

昼もたたく我門しらて水鶏哉 也有(蘿葉)

木母寺を昼から敲く水鶏哉 蓼太(句集三)

水鶏(土木) 除時令類倫・除城関則

蘆の家に槓の戸叩く水鶏哉 肖柏(大発句帳)

戸あくれば叩きそこなふ水鶏哉 夜章(蘆分船)

水門の内から叩く水鶏哉 梅室(故人五百)

油断して水鶏に扉叩かるな 支考(葛松原)

水鶏(神人) (飲食) (肢体) 除建築

夜もすがらあだ口たたく水鶏哉 立圃(空磔)

足音の間をたたくくるなかな 李下(其袋)

支考百ヶ日

納豆ほとたたく水鶏も手向哉 吳井(文星観)

さひしさも骨を叩かぬ水鶏哉 巢兆(年蒼)

水鶏(人事) 除肢体等・睡眠ナシ

喪の内をそろく叩く水鶏哉 兀峰(桃實)

水鶏(日時) 除人事等

夜を残す水鶏は老を叩きけり

濁子(統虚栗)

叩きさしていぬる夜明の秧鶏哉

文素(類題発句集)

叩かずと明け易い夜を水鶏哉

筆馬

水鶏 除肢体等・除人事日時

聞き居れば叩くでもなき水鶏哉

野水(あらの)

口たゝくものゝ淋しき水鶏哉

蒼狐(古今句鑑)

二度三度叩て一度鳴く水鶏

嵐外(今日の昔)

をのが名にたゝき杖持くいな哉

孝晴(犬子)

『分類俳句全集』に収載する「水鶏」の句は、総数一九七。そのうち左記のごとく「戸」を含むものを二九句、「叩く」を含むものを四五句、両方ともに含むものを七句数える。

本句への影響について考えたとき、左の句が気になった。

啼く方へ草の戸動く水鶏かな

舍国

水鶏の啼声と戸の動きは、まったく重なる。ただし、舍国は「水鶏」に重心を置き、虚子は「繩朽ちて」と描写して「戸」に重心を置いているところは異なっている。この句に限って影響関係を述べるのは難しい。

それよりも連歌・古俳諧の「水鶏」の句の中において、「戸」「叩く」を含んでいる句の割合が、かなり高いことに注

目すべきだ。また、連歌の発句において、ことに多く含まれていることにもである。これによって「戸」「叩く」を含む「水鶏」の句は、それだけ古風な詠みぶりであることが知られる。

また、先に見た子規の「水鶏」の句はまさにこれらの影響下にあることがわかる。

掲出句と同時代の「水鶏」の句をすでに紹介した句もあるが、『新俳句』（子規関、上原三川・直野碧玲瓏編 明治三十一刊）によって見よう。

水鶏遠く月有明けて川杳かなり 飄亭

繩朽ちて水鶏叩けば明く戸也 虚子

から池や昼も水鶏の出で走る 静月

洪水のあとに水鶏もなかずなりぬ 蒼苔

妻に聞けば我留守を水鶏たゞきけり 可全

水鶏聞きに来よと申しぬ上根岸 墨水

全体数が、少いので安易に比較することはできないが、掲出句以外には「叩く」をあわせ用いているのが一句のみ、「戸」は一例も見られない。虚子の句が、最も古風であることは確かだ。というより他の明治の句いのする句の中で超時代的であるとも言えよう。

先に見たように子規の水鶏を詠んだ短歌、俳句は「戸」「叩く」を多く含むものだった。そこから虚子はその言葉の関係を学んでいる。ただし、子規は、ことに俳句においては、そのことばの関係を楽しんで、否定的に言えば振り

まわされるような句作をしている。それに対して虚子は、その本意を押しさえつつ、もっとさりげなく用いる。深い関係をもっているはずのことばなのに、それを感じさせない。まるで、それらの言葉の関係が生まれたその瞬間に立ちあっているような風情である。